

攻撃実用機―一三五、同練習機―二四〇、
制空―一五〇、偵察―四

中国 計 五四五

攻撃実用機―一六五、同練習機―一六〇、
制空―二〇〇、偵察―二〇

近畿 計 四七〇

攻撃実用機―一一五、同練習機―一六〇、
制空―一六〇、偵察―三五

中部 計 三一三

攻撃実用機―一六〇、同練習機―一八〇、
制空―七〇、偵察―三

関東 計 六六五

攻撃実用機―二二〇、同練習機―二五〇、
制空―一八〇、偵察―二五

奥羽 計 四五〇

攻撃実用機―一五〇、同練習機―三五〇、
制空―一五〇

朝鮮 計 一六八

攻撃実用機―七五、同練習機―九〇、偵察―三

機種別合計 四六二五(内 桜花 二、三〇)、

攻撃実用機―一一五五(内 桜花 二、三〇)、

攻撃練習機―二三〇〇、制空機―一〇三〇、

偵察機―一四〇

右表の如く、地域別にある如く、九州地域が航空兵力の主力をなし、桜花(特攻用、親子機)も関東と共に機数は多い。

潜水艦の戦闘

南鳥島補給戦

愛知県 大谷 夙

志願して海軍に入った。その三年間は、軍艦「三限」で海上勤務を体験。さらに潜水艦教育訓練を受け「伊号一二二」潜水艦、「伊号一二三」潜水艦、「波号一〇六」潜水艦の勤務を経て、「波号一〇二」潜水艦で終戦を迎えた。諸般の情勢には逆らえず、一番危険な部隊として最初に復員させられることとなる。

しかし私は米軍へ艦の引き渡し要員として艦長と共に残留し、他の戦友は全員八月末復員した。ここに顧みて潜水艦と共に歩んだ五年間、最後の務めとなった思い出を語る。

制空・制海権を奪われた日本海軍は昭和十八年春頃より撤退、転進を繰り返して、遂に補給に潜水艦を使うようになり、昭和十九年末にはこれら補給の専門の艦が建造された。この潜水艦輸送のことを兵隊さん達は「マル通」と言っていた。その「マル通」がいよいよ始まる。千四百カイリ南東の小島の南鳥島の守備隊に、陸海合わせておよそ三千二百人の食糧、弾薬を満載、と言っても六十トンの物資輸送の任務である。

必ず成し遂げるとの信念であった。「虎は千里を往って千里還る」という諺に因んで雄雌の虎を画師にお願いして描いてもらう。鶴岡八幡宮に参拝、任務完遂を祈願し「南無八幡大菩薩」の幟一旗を戴き、準備は整った。

出港ラッパと共に繫索を放し、見送りの基地隊の

方々に力いっぱい帽子を振って応える。船越の丘でも数人がハンカチを振っている。乗組員の家族か？

湾を出ると臨戦準備である。金子^{きんし}弁を開け、ベント開けて潜航、ソリムの調整を終え浮上。館山沖で再度潜航、海底に沈座して日没を待って浮上、大洋に出る。敵か味方が逆探に感度しきり、敵潜を警戒して針路を東にとり、東経十五度くらいで南下し、一応大事をとって進路を偽装する。夜明け前に潜航、速度は一ノット半、潜航十三時間余り、暗くなつて浮上する。蓄電池の容量も半分以下、四時間くらい急速充電し、その後は定格充電を出来る限り長時間行う。

潜航して全速で走ると三時間以上の容量である。電液は流出しないように設計されているが、何かの理由で艦が四十五度以上傾斜すると電液が流出する。それが艦底のビルジに混じると、水素ガスが発生してお陀仏となるから、絶対に四十五度以上艦を傾斜させてはいけないのである。

艦内食事は設備・器具・材料と普通の家庭と同じだ

と思うが、調理場が約七平方メートルで食品庫、冷蔵庫、真水タンク（一人当たり十三リットルで二十四日分だから貴重品である）、洗米・炊飯・お茶・料理の一切を賄う器具と五キログラム炊き電気釜三台と電気魚焼器一台、他に残屑処理装置一式である。艦内で十分間お湯を沸騰させると、湿度は九十パーセントを超えて天井に水蒸気が結露して雫がポタポタ落ち、床はびっしょりと濡れる。艦内諸設備機器類は、主機械を除きすべて電気であるから、湿度が高いと故障の原因となるので、無火食調理なるものが研究され、これは波号型潜水艦のために特別に開発されたものである。潜航中の艦は完全に密閉されて外気の流入は全くなく、僅かに循環通風はあるが蓄電池節約のため一日数時間しか使用しない。

狭い艦内、その容積は約三百八十立方メートル、その中に主機械電動機蓄電池があつて、更に六十トンの荷物。また、乗組員四十三人の呼吸に必要な空気も十二時間以上潜航すると炭酸ガスの濃度は〇・六パーセントを超え、艦内温度は体温以上となり冷房設備も能

力不足、こんな状態で調理の蒸気を出す……？

無火食という調理法は糲ほじといつて普通に炊いた飯を急速低温・乾燥したもので、お湯を入れて三分間待つと御飯となる。副食もすべてこの有様、お湯は八十度以下で、絶対に沸騰させない。乾燥肉・乾魚肉・塩獣肉・塩魚肉・粉末卵・粉末醤油・粉末出し汁の素・乾燥野菜・缶詰の肉、魚、果物、野菜等、八十度以下のお湯で調理する。洗ひ物は海水で洗ひ、真水でさっと流す。

食事の準備が終わると残屑整理。紙箱・空き缶等は全部五センチくらいに切断、または圧縮して処理器に入れ処分するが、これがまた大変な作業である。艦長、または哨戒長に残屑整理の許可を受け、蓋を開き残屑を入れる。蓋を閉め、締めつけネジを固く締める。次に高圧空気を艦の深さに合わせ空気溜タンクに入れる。次に外舷弁と排出弁を開き、容器内に海水が逆流していっぱいになったことを圧力計により確認して空気弁を開く。じつと排水音を聞きながら空気が艦外に出ないうちに空気弁を閉鎖、続いて排外弁を確実

に閉じるが後からでは締まらない。水圧でダメだ。容器内の残圧を抜き、容器の蓋を開ける。この操作を三、四回繰り返して、自分の残屑処理が終わる。この処理装置もひとつ間違つて操作すると漏水・浸水となつて艦の運命を左右する原因ともなり、慎重確実な操作が要求された。

また、排水空気過多は、空気と残屑を海面に噴出して敵に所在を知らせる結果ともなるため、細心の注意が併せ要求された。水上航走時は、嵐でなくとも艦はかなり揺れるため食欲は減退し体重は減り、ほとんど食事を食べないでいる者もあり、四十三人の食事が米一升で間に合うようなことが再三あった。なかには艦が揺れるほど入ると言う勇士も二人ほどいた。食欲のない時でもサイダーとミカンの缶詰は、ほとんどの人に喜ばれた。

港を出て一週間を過ぎる頃、ヒゲは伸び、防暑服は汚れ、汗の臭いと共に鼻をつく。でも、いつの間にか慣れて感じなくなる。こんな艦内の状態で二十数日間、風呂・シャワーなど見たことなし、せめて食べ物

だけでもと言いたいが、現在のインスタント食品に比べると大変お粗末なものだった。当時、経理学校で無火食の研究指導された教官が、戦後食品会社に招聘され、現在のインスタント食品が開発販売されたとか、風聞真偽の程は定かではないが、製品の発想は当時の無火食と同じだと思う。

今日は通常の行路を大分離れ、昼間水上航走、昼食を終えてちよつと早いが哨戒の交替に艦橋に出た。「オ、アレ、ナンダ」右後方上空に太陽光を受け、キラッと輝く航空機発見、急速潜航。遠目の利くことは度々助けられる。

○日、もうそろそろ見えても良いはずだが、と潜望鏡を少しづつ右に回すが何も見えない。左に九十五度、熱田島（アッツ）、南鳥島。横須賀を出てから十一日、西側二千メートルの地点に到着した。

早速、見張り所宛に揚塔予定を潜望鏡より発信、続いて見張り所より敵艦の距離などの情報を受けて島の南側に移動する。そして静かに潜航沈座して日没を待

つこと教時間、各配置につき露頂深度で潜望鏡を覗く。敵海防艦らしき艦、千トンくらいか、停止している。じつと我慢、敵艦は動く気配もない。距離千メートル、艦長深考の末、突入を決断する。

艦長は白鉢巻を締め直し伝声管に向かい「只今より敵艦の真下を通過する、各部署ともぬかるな。聴音は敵の去就に注意せよ」と。深さ三十・前進・半速、聴音手はレシーバーに伝わる音源を聞き漏らさじと全神経を耳に集中している。全員、息を殺して緊張の三十分、突然「ヤッター」と艦長の声があり、そのまま湾内に潜入。

ダイハツ二隻を横付けし、艦は三直哨戒で充電を続行しながら揚荷作業を行う。糧食などは、一袋二十キロに統一されてゴム袋に入っている。途中で敵襲を受けた場合、潜水艦はハッチを閉めてそのまま潜航する。しかし糧食は海に浮かぶようにとゴム袋である。

この真上作業は相当な重労働であった。一時間程で二隻のダイハツに積み終わる。そのあと守備隊の副長

が艦内に来られ「とにかく食糧不足で大変困っている。何でも良いから貰えないか」との申し出があり、艦長は主計兵・先任下士官と相談、自艦の食糧十日分を残し、各個人の嗜好食品や煙草等、トン余りを渡す。副長は涙を流し喜んでおられた。お互いの武運を誓い、固い握手を交わし別れを告げる。直ちに潜航、ツリム調整、帰途につく。沖合に頑張っていた敵艦は辛いにも姿を消していた。

司令部宛報告電報は本艦より発信すると敵に当方の帰途所在を察知される恐れもあり、電文を起案暗号として守備隊より六時間経過後発信してもらうように依頼する。見張りには特に気を引き締めて、横須賀目指して草駄天航走で帰りを急ぐ。

○日二十二時頃、突如後方水平線に照明弾らしき閃光を発見、機械停止、潜航急げ。けたたましく急速潜航のベルは鳴り響く。各配置に急ぐ。「ハッチよし」「頭部弁よし」の報告があると「ペント開け、ダウン三十、深さ三十」と、立て続けに下る号令である。

「各部配置よし」の報告、深度計の日盛を読む「深さ三十メートル」の潜航手の声を聞いて、ホッとお互いに顔を見合わせにっこりと無言で微笑む。

この間約三十秒。訓練の成果とは言え、さすがと思う。しばらくして露頂深度で潜望鏡を覗く。東天に皓々たる月明かり、まるで微笑みかけているように。さては月の出を見間違えたのでは、でも何もなくて良かった。

平穏な日が続く。針路は三百度、もうこの頃になると一度も風呂ナシ、洗濯ナシ、汗と垢で体は香り芳しく、腹巻の内側にはうずうず痒いやつが粟粒のような卵を四列縦隊に並べている。ぱりぱり掻きながらも何故か殺そうとはしない。我が身の分身だと言う者もいた。

潜航をやめて浮上するも満天の黄砂（大陸からの）に加え西風強く、船体は翻弄される。水上航走無理と判断、深さ三十メートルでも艦体のローリングがある。深さ六十メートルで天候の回復を待つ。

日本の近海は、敵潜水艦に見張られているので日の出前に潜航して洲崎沖で浮上する。艦橋のハッチから入る空気もすがしくエンジンの響きも殊の外堅快に感じる。掃海水路を経て横須賀港棧橋に無事接岸。潜水艦は水中にあって見えず聞こえず、ただ一つ潜望鏡と聴音のレーシーバーから、ほんの僅かな情報を知るだけである。その忍耐的精神力が潜水艦乗りに求められる最大の要素であろう。

この大戦において百数十隻余りの潜水艦が海底に消え去ったが、その乗組員に想いを致す時、一抹の寂しさが私の胸中に漂う。

平和とは何とありがたいものだ。三百数十万の戦死者、その尊い生命を礎として築かれた今日の日本国。そして現在の平和と繁栄に感謝の念を捧げ、長久を祈るものである。